

Long-term follow-up of vanishing tumors in the brain: How should a lesion mimicking primary CNS lymphoma be managed?

Yoshiko Okita • Yoshitaka Narita • Yasuji Miyakita • Makoto Ohno • Shintaro Fukushima • Akiko Maeshima • Takamasa Kayama • Soichiro Shibui

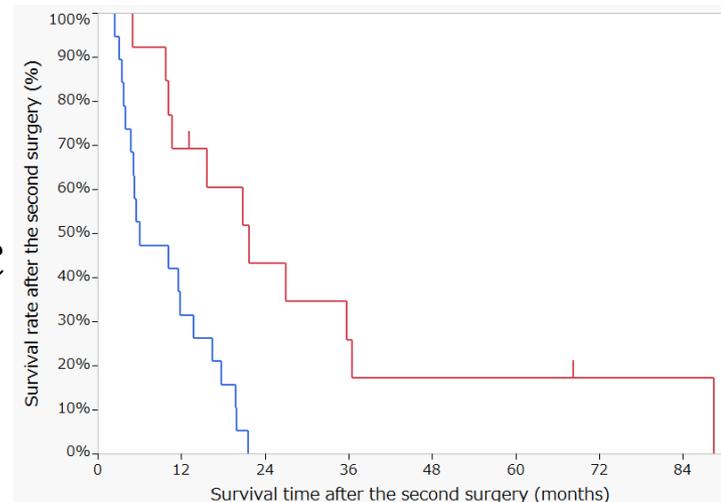
- 頭蓋内腫瘍性病変の中には、手術を行っても病理診断がつかないものがあり、その多くは中枢神経系リンパ腫などの悪性脳腫瘍や多発性硬化症であるが、原因不明のものも多い。
- この現象はVanishing tumorとして報告されてきたが、その長期経過や経過観察の指針については明らかにされていなかった。
- 診断不明の頭蓋内病変はidiopathic inflammatory changes in the brain (IICB) という新しい疾患概念を提唱。
- 当センターの症例と多くの論文を調べて悪性脳腫瘍が発症する可能性があることを考慮して、少なくとも5年間は経過観察が必要であることを報告した。
- 欧米では、経過観察が十分に行われていない病態であり、この論文により vanishing tumorの長期予後や経過観察指針などを初めて明らかにした。

Pathological findings and prognostic factors in recurrent glioblastomas

Yoshiko Okita • Yoshitaka Narita •

Yasuji Miyakita • Makoto Ohno • Shintaro Fukushima •

Takamasa Kayama • Soichiro Shibui

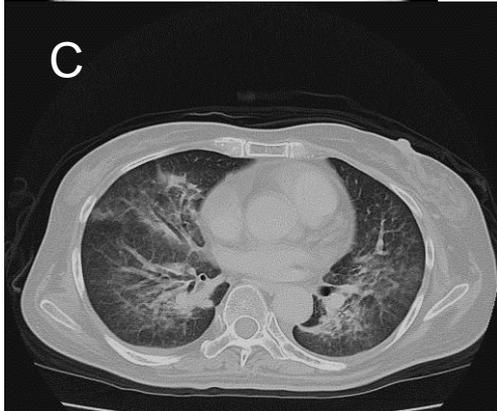
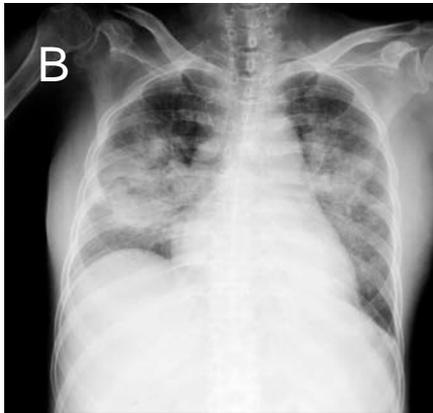


- 再発後の摘出検体をもとに、遺伝子解析 (*MGMT* promoterのメチレーションなど)・臨床因子について解析
- MIB-1 index・手術摘出度・年齢などが再発症例の予後因子として重要 (多変量解析)。
- 再発例に対する手術の妥当性を証明。
- TMZ (アルキル化剤) で治療すると、*MGMT* promoterのメチル化の頻度が減少し、アルキル化剤に対する耐性のメカニズムを明らかにした。

CASE REPORT

Reactivation of cytomegalovirus following treatment of malignant glioma with temozolomide

Yoshiko Okita • Yoshitaka Narita • Yasuji Miyakita • Makoto Ohno • Kohki Aihara • Takamasa Kayama • Soichiro Shibui



- 悪性神経膠腫に対して用いられるTMZはリンパ球減少が特徴的であり、ニューモシスチス肺炎やB型肝炎ウィルスの再活性化を引き起こす。
- TMZの治療により日本人が多く罹患しているサイトメガロウィルスの活性化により肺炎を起こすことを国内で初めて報告し、TMZを販売するMSD社に対して、添付文書を改定して臨床医に注意喚起を行うよう要請した。
- TMZのみならず、固形癌を治療するすべての臨床医に対してサイトメガロウィルスの再活性化を意識することを警告した。